

ΚΟΣΜΟΣ

特集・旅と本……………	1
知っておきたい図書館4 シリーズ読書論・ 私の読書論……………	5
私のすすめる一冊の本6 白山より……………	6
工学部分館より……………	7
今春・卒業される方へ8 シリーズ 読書論筆者紹介……………	8
館内だより……………	8

1981 冬 (No. 52)

“神戸で出会った「マリウス」”

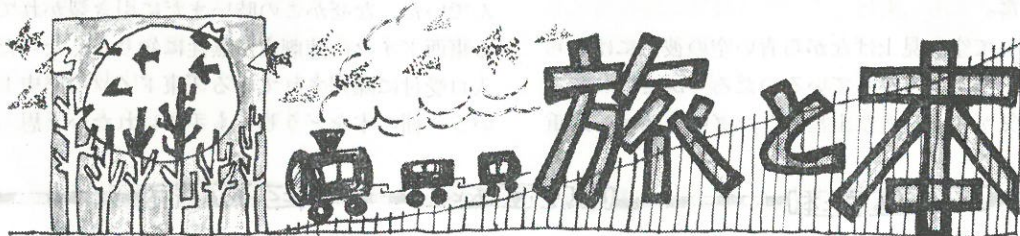
飯 島 宗 享 (文学部教授)

古本屋に長くいるとジンマシンが出る上、東京ではその余裕もないので、近年では立ち入ることもない。だが旅先では、町を散歩していて、ふと入ってみることがある。三宮に後藤書店といったと思うが、かなり大きな古本屋がある。十数年前にこの店で明治34年版の兆民の「一年有半」正統二冊を手に入れ、文庫本などで読むのとは又ちがった趣きを楽しんだことがある。表紙に一方は中江篤介著一季有半とあり、他方は中江篤介著統一季有半とあり、同じ兆民が「篤」と「萬」、「季」と「年」を混用しているのも面白かった。数年前には同じこの店で実業之日本社編「岡田式静坐法」に見参して随喜した。木下尚江が後年これに入信と称してよい傾倒ぶりを示したものだけに、実体を知りたいと思いながら怠けていたものだった。大正2年のこの版には、尚江の「余が思想の一大転化は静坐の賜也」と題する賛辞が、高田早苗その他の朝野の名士の賛辞と共に載っている。

さて本年6月、甲南女子大で比較思想学会がおこなわれた機会に、又この店に寄ってみた。そこ

で出会ったのがマルセル・パニョル作永戸俊雄訳「マリウス」であった。昭和26年にはもう少しましな紙もあったと思うのに、これはワラ半紙に印刷した新書版の粗末な本で、そのせいか店頭によりどり百円の仲間入りをしていた。だが、この本は私にとっては多彩な回想を誘うに十分なもので、一夜私はそれをむさぼり読んで、次から次へ追憶にふけて眠ることを忘れてすごした。

昭和15年は私が大学に入学した年だが、そのころ私は新劇に熱を上げていた。年初、まだ高校生だったときに長田秀雄の「大仏開眼」を見た。大学に移ってまもなく、ヴェデキント「出発前半時間」と真船豊「遁走譜」を見た。いずれも新協劇団、築地小劇場でのことだった。ところが夏休中に新協劇団と新築地座の団員が大量検挙され、「自発的」解散という出来事があった。新劇を潰滅させる弾圧で、戦争に向けていよいよ暗さを増す時勢だったのだ。秋には大政翼賛会がスタートしたし、築地では絶えて上演はなかった。そんな中で築地小劇場は国民新劇場と名を変え、いよいよ戦意昂揚の芝居小屋になるのかと思っているとき、師走に入って文学座がパニョルの「フェニー」をそこでやるという。当時、私たちにとって文学座とは新劇の風上にもおけぬ芸術至上主義に



逃げこんだお遊び劇で、それゆえにこそ解散の憂き目にもあわぬのだと見られ、その常打劇場だった飛行館など覗いてみたこともなかった。だが、それしかないとなると、劇場への愛着からもいつてみた。パニョルについても無知、そのマルセュー三部作「マリウス」「ファニー」「セザール」についても文学座の宣伝文で知るばかりの状態での見物だった。実際には、劇は十分に堪能させてくれ、渴えをうるおしてくれた。土地柄、海の彼方に夢を追わずにいられない青年マリウス、その理解者たる父セザール、無邪気な計算をする恋人のファニー、これらの人物の織り成すものは文学的テーマになりえていたのだ。杉村春子の少女ファニーは愛らしく、甲高い声での主役だった。

「マリウス」を読みながらの新劇回想は、やがて移動劇団としての瑞穂劇団に編成された「解散」組が、築地で旗揚げ公演に「左義長まつり——呉軍港秘話」を上演したときの感激にまで及んだ。老婆役の北林谷栄と青年宇野重吉の熱演、客席の熱気。昭和17年のことで、その秋に私は召集されたのだった。(80.12.15)

“本は旅の落としもの”

竹内良夫(経済学部教授)

<旅には青い空だけあればよい>

私はいまだかつて本を道づれにしたことがない。というのも、神の創造した自然の前には人間が創造した文学も芸術も足もとにも及ばないではないかと思うからである。都会人の汚れも自然が暖かく包んでくれる。新幹線を避けて私が好んで利用する各駅列車の窓辺の景色さえ、都会の疲れをいやしてくれる。播州赤穂の無人ホームの風情も山陰の保津川下りの眺めも各駅列車ならではのものである。誰もが「退屈で辛い」というシベリヤ鉄道の8日間も、窓辺の景色を飽かずに眺めたものだ。

そして空を見上げながら青い空の彼方にはさらに青い空がひろがっているのだろうかと思いたい気がする。また土星のリングの正体は、比重

が同じ無数の石コロが引力と磁場に操つられて走る銀河鉄道ではないかと考えてみたりもする。どの本にも書いていない未知の世界を旅するのは実に楽しいものである。どう考えてみても私にとっては旅と本が関係がなさそうに思える。

ところで旅を重ねるなかで人の住む里には戦争の歴史があるような気がしてきた。だから私の旅はいつしか戦争の歴史を辿っていた。水俣への調査旅行のおりも、のどかな裏山にある「西南の役」の官軍の墓に百年前の合戦を想いつつ旅情を感じたものだ。文学青年でもない私の旅は、戦争には縁があっても本とはまだ無縁のような気がする。<戦争はもう終わったのだろうか>

「戦争は終わった」とうそぶきつつモダンなタケノコがノンノと群生しては百恵とピンクレディーとともに暗闇に消えていく。こうした新しがりやの日本の若者にたいして何かニヒリスティックな物足りなさを感じるのは私だけなのだろうか。おりからヨーロッパでは道路横断しながらキスを浴びせる陽気な若者によってナチス反対のデモが繰り広げられている。これも日本の若者と同じ世代だとすればそれを「カラスの勝手でしょ！」といっすませられないような気がする。

だが私は西ベルリンで戦争の傷跡をまのあたりに見た。今だに弾痕のある教会、廃墟の工場跡、主のないビルがそこそこにある。錆びたレールの無人のホームに立った時陽気なヨーロッパの若者が初めて哀れに思えた。税関の入口で数百人の親兄弟が抱き合って別れを惜しむシーンがいつまでもつづいた。いまだにお隣りの朝鮮半島が分割されていることも忘れがちな孤国日本の私には感無量であった。戦争のふるさとを旅するなかで旅と本が縁がありそうな感じがだんだんしてきた。

翌日東ベルリンの歴史博物館を見学した時の話である。中央に飾られている東ドイツのメーデーの写真の隣に何と日本の中央メーデーの写真が並んでいた。なぜかこの時いまだに引き裂かれていた東西ドイツの悲劇史が無性に知りたくなった。入口受付に陳列されている「東ドイツの歴史」という一冊の本をどうしても手にいれたいと思った

のである。だが5マルクの所持金では12マルクの本は買えなかった。私は翌朝の列車でワルシャワ経由で日本へ帰る予定であった。私は2度と手にすることが出来ないかも知れぬこの一冊の本を恨めしげに眺めているしかなかった。

閉館後のレストランで日本人が話しかけてきた。東ドイツで勉強したいというK君だった。東西の体制間を10分毎に往来する電車の中で日本に帰ったらこの一冊の本を届けてくれると約束して西ベルリンで彼と別れた。私は今旅を楽しく想い出すことができる一冊の本を俵っている。まだ手にふれぬことができぬこの本が旅の道づれとして語るすることができる唯一の本である。

“小さな書店へのアプローチ 中国とスウェーデンの旅から”

高橋 儀 平 (建築学科助手)

与えられたテーマにふさわしくないのだが、私は元来、旅に出る時あまり本を携帯しない。わずかに、行先の資料のみである。とりわけ海外旅行のように1kgの重量が貴重な時は尚さらである。それは一つに、今までの経験では、必要不可欠な資料の他には、現地での本深しに重点を置きたいということ。また、ほとんど持ち込んだ本を落ちついて読む機会がなくなってしまうのが常だからである。それでも語学力のない私のお伴として、旅行先の母国語辞書は欠かさない。これにしても、現地で目を通すのは最初の2日間ぐらい。

機内ではほとんど自前の本は必要としない。私は、失礼ではあるが、この時間に他人の本を借用することになっている。ことに、どこの国の人かも見知らぬ旅人から、下手な言語を使用し、興味深そうに読んでいる雑誌や単行本を借りる時は、骨は折れるが、その達成した快感はまたとない。

機内は、私にとって、新しい書物に触れ、広い世界を知るグッドチャンスである。

いわゆる「4人組」の全盛時、今から7年前、私が初めて訪中した時のことである。

中国旅行も今日のように解禁されておらず、中

国語を学び、中国事情をマスターしてからの訪問は、私に多くの感動を覚えさせていた。憧れの地北京に立って数日後、私たちのグループによく待望の自由時間ができた。北京銀座と称される王府井大通りの長安街入口から数10メートル隔てた右側に有名な「新華書店」がある。中国唯一の新刊書店(全国各地にある)である。千鳥調子のエトランスを通り抜けると広いホールがある。2階には、科学や芸術の専門書があり、1階に文学関係の書物があった。驚いたことに、数日後、それまで10数巻ストックされていた「魯迅全集」がまたたく間に売り切れたという。私は他のメンバーに先を越されてしまった。延べ数万円という全集は、中国人の数カ月分の給与と等しい。私たちの行為とは反対に、若い店員たちは一体どういう思いであったろうか。

私は残念ながら、次の専門書を探すことにした。「中国营造法式」がその書名である。この書物には、その後5年目にして初めて巡り会えた。上海市内の小さな古本屋に私は感謝をしたい。

話はスウェーデンに飛ぶ。ストックホルム北方の小さな古い町の小さな書店での発見である。メディカルリハビリテーションセンターを視察し終えたあわただしい午後の寸時、私は思いがけなく貴重な書物を手に入れることができた。スウェーデンの障害者施設に興味を持っていた私は、出発前、関連する文献を色々調べていたが、中々適切なものはなく、ことに歴史的に解説してある文献は皆無であった。スウェーデンの障害者施設の項がほとんどないのである。

「OM DEN OFFENTLIGA VÅRDEN」というこの文献は、1976年に刊行されている。スウェーデンにおけるケア施設の状況を歴史的に解説し、図版も豊富である。文房具や雑誌にはさまれた片隅に、やや薄汚れた背表紙を発見した時の感動を今もよく覚えている。この書物は現在、常に私の目の前に位置している。以来、小さな書店は貴重であると思うようになった。どんな本が隠されているかわからない。小さな書店を発見すること、これが私の旅の心得である。

知っておきたい図書館

★ 国立国会図書館 (〒100 千代田区永田町1の10の1)
☎(03) 581-2331

⑨ 9:30AM - 5:00PM

⑩ 日曜日・祭日・年末年始

⑪ コピー <即日> 1回30頁以内、1日150頁まで

月曜日から金曜日まで 10:00AM - 12:00AM,

1:30PM - 3:00PMの間に申し込む。

<即日以外> 3~10日位かかる。

月曜日から金曜日は10:00AM - 12:00AM, 1:30PM - 4:30PM

土曜日は午前中のみ



※ 科学技術資料室、国連、官庁資料室、音楽資料室、新聞閲覧室、アソシエーション資料室、図書館学資料室、地図室、憲法資料室、法令、議会資料室などがある。

★ 東京都立中央図書館

(〒106 港区南麻布5の7の13)

☎(03) 442-8451

⑨ 火~金 9:30AM - 8:00PM
土、日 9:30AM - 5:00PM

⑩ 月曜日・祭日・毎月14日・年末年始

※ 特別文庫室(江戸時代の資料)東京室(東京の資料)がある。



★ 理化学研究所

(〒351 和光市広沢2の1)

☎(0484) 62-1111

⑨ 日~金 9:00AM - 5:10PM
土 10:00AM - 0:10PM

⑩ 日曜日・祭日・隔週土曜日、創立記念日(3/20、1/21)年末年始。

※ 紹介状が必要です。

★ 総理府統計局図書館

(〒162 新宿区若松町95)

☎(03) 202-1111 内480-488

⑨ 月~金 9:30AM - 4:30PM
土 9:30AM - 12:00AM

⑩ 日曜日・祭日・年末年始



★ 日本科学技術情報センター (JICST) 情報資料館

(〒176 練馬区旭町2の8の18)

☎(03) 976-4141

⑨ 月~金 9:30AM - 4:30PM
土 9:30AM - 11:30AM

⑩ 日曜日・祭日・毎月3月曜日、創立記念日(8/16)年末年始。



他大学の図書館へは紹介状を発行しますのでカウンターまでおいで下さい。



シリーズ 読書論

私の読書論

エッセイ読書人 神 太 郎

(経済学部42年度卒; 福島県出身; 本名・二連木 康)

「読書は快適な苦痛である」とは、私が子供の頃に天声人語を書いていた荒垣秀雄さんの言葉である。現在世の中には快適な楽しみは数多く存在するし、あえて苦痛を求めする必要はないと現代の若者が考えても当然かも知れない。もし私が彼等と同世代ならば同じ考えを持つことになったらと思う。しかしこと読書に関しては私は非常に恵まれていたし、ある時分までは不遜な態度もとっていた。

私の子供の頃は視聴文化よりも活字文化のほうが手近にあった。当時の駄菓子屋さんは子供文化の提供源であり、特にカバヤキャラメル の文庫引換券は人気があった。カバヤ文庫全五十冊をいかに早く集め読むかが仲間の競争であった。子供内での暗黙の掟があり貸し借りはナン、自分で揃えて読切ることが条件であった。その癖が未だに抜けず本の貸し借りは嫌いである。いまは手元がないが厚手のボール紙の表紙で製本された円卓の騎士ランズロット、リヤ王、ハムレット等懐かしい。雑誌は探海、新青年等伯母がとっていたものを意味も解らず読みまくるといふより、見まくっていたのは小学二三年頃、岩見重太郎、荒木又衛門、真田幸村、後藤又兵衛等の立川文庫講談本、江戸川乱歩の怪人二十面相から出発して、ポー、コナン Doyle 等推理物(その頃は探偵小説といっていた)、吉川英治の新書太閤記、三国志等の時代物、林不忘、牧逸馬、谷譲次この三人の作家が同一人物であった驚き、隠れて読んだ石中先生行状記の性的興味、時代読物雑誌の山手樹一郎、川口松太郎等のさし絵に使われた岩田専太郎画くところの色っぽい女性にあこがれたあの少年時代、特に意義も意識もなく唯面白さに夢中になってそ

れらを読みあさっていた。

しかし無意識下の中に当然それらの本の影響は、良きにつけ悪きにつけ受けていた。そんな中で自分の精神形成に大きな繋がりをもつ本と出逢っている。父が法曹関係だったので割と硬いものはあったのだが、正木ひろし弁護士著八海事件(真昼の暗黒とも呼ばれた大きな冤罪事件であった)を読み異常な興奮にかられ親父を困らせたのは中学に入ったばかりの時だった。その時以来いまでも、人間が人間を裁くということに疑問を感じつつけている。ましてや冤罪事件はあとをたたないのだ。またその頃は禁書と云われるのも多数読んだし今でも持っている。特に発売一週間で発禁になった、サド公爵の初版は大切にしている。

ませていた中学から高校時代の読書生活、ユングからC・ウイルソンと巾が広がった大学時代、古本屋に出入りしては私家版を探り出し或いは初版本を買ってはほくそえんでいた時に、たまたま目に飛びこんだ文章があった。少し長いが引用してみる。小泉信三氏の読書に関する言葉である。「読書は、ひとり書中記載の事実を学ばせるばかりでなく、当然観察思考そのものもまた読書によって養わなければならない筈である。ただその場合警戒を要するのは、間断なく読書にふけり、書籍にばかりたよるあまり、ただひとえに書中の記載を信じて、自分の目でみたものは重くせず、本に書いてあることのみ信用して、だんだん自分の目で見ることがおっくうになり、知識をただ書籍にのみ求め、あるいは自分で考えずに、著者に代って考えてもらうことの易きにつく習性が、とかく養われがちであること、これである。」ショックだった。

ただ読書量を誇り他人の言葉の受け売りのさもしいエッセイ読書人の不遜な姿が行間から浮び上ってきた。あれから何年たったろうか、ともすると忘れがちな文章を反芻しながら、苦痛に身をゆだねている今日である。



私のすすめる一冊の本

渡辺 慧 著

「生命と自由」

岩波書店, 1980 (岩波新書 122)

八 木 江 里

(工学部教授)

著者渡辺氏は、独創的な物理学者として有名な人。第2次大戦後アメリカに移り、現在はハワイ大学名誉教授として、一年の約半分は滞日されている。この小冊子(岩波新書)は、上智大学の「生命科学研究所」で大学院生を前にして行なわれた講義をもとにして、書きおろされた。これらの大学院生の出身がまちまちだったために、高校以上の専門的知識をいっさいないものと仮定して書かれている。したがって誰にでも、各自の興味にしたがって読んでゆける好書となった。

全部で5章からなりたっており、最初の2章には、生命の宗教的、哲学的な分析がなされている。著者は「機能(こと)論者」としての立場から、生命もまた「こと」として理解しようとしており、その観点から、生氣論や機械論が論じられている。

第3章では、物理学からみた生命が述べられている。すなわちここでは、生物学を物理学に還元しようとする種々の試みが紹介されている。古くは、「幾何学的機械」の存在から、新しくは、熱力学の「開かれた系」の研究をおこなったベルギーの物理学者プリゴジン(I. Prigogine, 1917-)一派の研究まで含まれている。この章の最後に、著者は、存在論的、概念的、および法則的的局面からみて、還元論というものは、不可能な企図であると結論している。このあたりが、平均的物理学者と比較して、この本の著者の独自性が光っているところであろう。

第4章では、化学からみた生命が述べられている。ここでは、分子遺伝学が紹介され、「情報」という概念によって生命が理解されるようになった事情が説明されている。著者はこのような分子遺伝学の功績を、「情報」という物理化学に存在

しない概念を導入して、還元論の不可能性を示したことにあるとしている。

第5章は「自由追求としての生命」と題して、著者をもっとも力をいれており、渡辺氏自身の生命観が述べられている。まずまとめとして「生命の4つの特性」として、次の4つがあげられている。

1. 非決定性。
2. 価値追求性(未来指向性)。
3. 実行能力。
4. 脱物質性(変化を通じての自己同一性)。

ここで著者は、「主として哲学的な見地から認められた生命の本質の重要部分が、科学的見地から観察された、または推定された生命におけるエントロピー減少の傾向と密接に関連している」(本書193ページ)というきわめて含蓄のある示唆をおこなっている。この主張は、いわゆる“二つの文化”にかける新しい橋のあり方を暗示したものであるとしてきわめて重要であると評者には感じられた。

最後に、著者は人間の価値体系について論じ、人間の価値体系とは、人間の個体として、また種族としての広い意味での生存・残存を中心に統一されているものと指摘する。そして価値とは生命を前から引張るものであり、因果律のように後から後押しするものではないと主張する。著者はこの小冊子を世に出して「科学と哲学が、古い伝統に由来する因果性の束縛から解放されて、もっと大きな視野をおおふような新しい方向に向かって動き出す」(本書198ページ)ことを期待しているという。小冊子ながら野心作である。(評者は物理学史、科学史専攻)

>>>>>>>>>><<<<<<<<<<

白山より

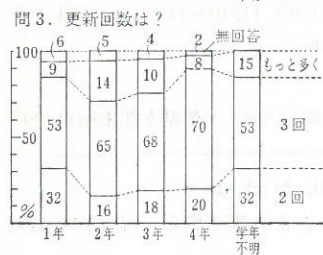
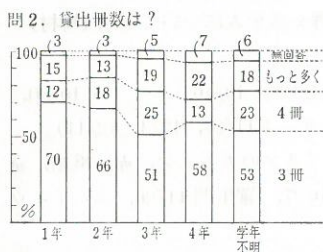
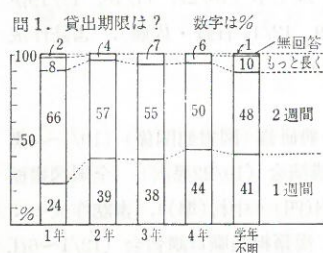
<春休み貸出について>

春休みを目前にひかえ、図書館では2月6日(金)より長期貸出をします。返却は新学期になってからです。大にご利用下さい。尚、開館日・開館時間については、“春休み図書館利用のしおり”(1月下旬発行)をご覧ください。

工学部分館より (アンケート報告)

工学部分館では去る10月20～23日に学生利用者を対象としたアンケート調査を行いました。用紙を配布し、記入したものを回収する方法をとりましたが、配布数800、回収数610、回収率76%、これの全学生に対する比率は16%です。

内容は、(1)貸出期間、貸出冊数、更新回数希望、(2)図書館利用と施設・設備について、(3)蔵書内容についての意見、(4)開館時間について、(5)Back ground musicについての感想、(6)館員への要望その他でした。以下は簡単な報告です。



1. 貸出期間、冊数、更新回数については学年毎の希望数の比率を表によって示します。左の表によれば期間を2週間にしたいという希望がかなり多いようです。冊数3冊と更新回数3回とは現行通りであり、かなりの学生はこれに満足していることがわかります。

2. A: 利用の手続きに関して

(1)貸出手续の簡略化(帯出カードの改善、コンピュータ化等)23人。(2)利用度の高い本は、禁帯出して常時ストックする、15人。(3)排架をわかり易くすること、8人。(4)目録カードを見やすくすること、7人。(5)盗難防止機器を備え、鞆の持込みを可とする、2人。

以上の他に細かい意見を述べるならば、新聞のマイクロフィルムの利用法を教えてほしい。洋書の読書の勧めをコスモスへ。更新方法の揭示。辞

書の貸出を。切り抜き対策を。長期休暇前に休館日のプリントを。等々。

B: 設備について

(1)座席数の増と改善を、36人。(2)狭いから、更に広くすること、33人。(3)ロッカーの利用を便利に、13人。(4)複写に関して(機械、料金等)10人。(5)ブラインドの完備、8人。(6)照明を明るく。ベランダにベンチを。各々3人。尚(2)については、別館を作る。増築して、3階建とし、閲覧室、書架、自習室と分離する等の提案があった。以上の他に、休憩所を良くすること。冷房を強くすること。新聞コーナーへ椅子を。机についたてを。喫煙室を設ける。等々。

3. 蔵書内容について

(1)専門書を購入する、135人。(2)専門書外の人文科学、教養書の購入、84人。(3)新刊書の購入、77人。(4)雑誌(教養的な物も含む)の購入、33人。(5)実験書の購入、15人。と蔵書の少なさに対する意見が圧倒的に多くありました。

4. 開館時間について

(1)もっと長く延長してほしい、175人。(2)現状のままで良い、83人。(3)早くから開けてほしい、53人。(4)土曜日の延長、30人。これらの中には、時間の指定した人もあった。その他、日曜、祭日、又、長期休暇中にも開館希望の声もあった。これによると開館時間に対しては、短か過ぎることを、かなりの学生が訴えていました。

5. Back Ground Music についての感想

これは、最近、閲覧室に Back ground music を流し始めたので、それについての意見を聞いたのですが、(1)良い、186人。(2)とても良い、58人。(3)良くない、45人。(4)考えて入れよ、11人。でした。圧倒的に賛成者が多い中で、反対者も決して少くないことがわかります。尚、更に意見としては、新しい曲を。学生に選曲させてほしい。巾広い曲を。音量を小さく絞る等がありました。

6. 館員への要望

(1)館内を静かにさせてほしい、35人。(2)良い、31人。又、その他、良くない態度の指摘等々。以上が、簡単にまとめましたが、これらの意見を良く検討して、できる丈、努力して行きたいと考えています。

＜今春、卒業される方へ＞

——校友貸出しについてのお知らせ——

今春卒業される方は、卒業と同時に東洋大学の校友になります。東洋大学図書館では、卒業後も引き続き図書館を利用していただくために、校友の方にも図書館を開放しています。

利用するためには、「東洋大学図書館利用カード(校友)」が必要です。「カード」の交付を受けるには、図書館カウンターへ卒業証明書を提示し、登録をして下さい。

貸出条件は、館内閲覧が5冊まで、館外貸出が1ヶ月間3冊までです。なお、詳細についてはカウンターまでお問合わせ下さい。

卒業後も図書館をご活用下さい。

工学部分館については、カウンターまでお尋ね下さい。

“シリーズ読書論” 筆者紹介

神太郎さんは、現在FM東京の日曜日12時から「サンデイミュージック」という2時間にわたるワイド音楽番組のDJを担当されています。この番組は、FM東京開局以来11年目という長寿を保っており、このことは、DJ担当者神さん個人の人柄による人気にはかならないと思います。本学在学中は、今年3月に定年退職された藤森良夫先生のゼミの第三期生として研究活動され、現在もその仲間と先生との交流を定期的に行っているそうです。また、文連サークルの放送研究会にも籍を置き、このサークル活動のかたわら喫茶店でDJのアルバイトをしていらっしゃいました。この頃喫茶店DJが流行し、神さんは、その走りともいべき存在でした。スポーツ・音楽、そして初版本集めという珍しい趣味をお持ちで、現在その収集が3千5百冊にもなられたということで。(矢野)

館内だより (10/1~12/24)

～会議～

工学部分館運営委員会 (10/9), 国公立大学図書館協力委員会関係 (10/16, 10/22, 12/19), 私立大学図書館協会: 東地区役員関係 (10/20, 12/12), 西地区役員会 (10/23), 白山運営委員会 (10/28), 白山連絡会 (11/4, 12/9), 朝霞分館連絡会 (11/12, 12/24), 工学部分館連絡会 (12/8), 仏教図書館協会臨時総会: 仏書共通分類の検討 (11/27), 日本図書館協会大学図書館部役員会 (12/24)

～研究分科会～

資料組織 (10/13, 11/17, 12/15高橋・井田), 相互協力 (10/14, 11/11, 12/10村田), 書誌学 (10/18, 11/15, 12/13山内(四)), 理工学 (10/22, 11/18, 12/19伊藤(美)), 分類 (11/19, 12/17日野・佐藤), 書誌作成 (11/14, 12/11小笠原)

～その他の研修～

私立大学連盟主催一般研修(図書館関係) (10/1~4黒沢・藤野), 楊威理氏講演会 (10/22黒沢), 全国図書館大会 (10/30~11/1山内(四)・中村(準)), 書誌作成セミナー (11/21~22嶋田), 漢籍担当職員講習会 (12/1~6江沢), 講習会・漢字処理システムについて (12/1崎村)

～催しもの～

朝霞視聴覚アワー (16mm 10/16, スライド 10/30, ビデオ・ステレオコンサート 11/27, 12/4, 12/11)
白山映写会 (チャップリンのカルメン, 赤い風船, 奇跡の人・ヘレンケラー 10/27, 羅生門 11/26, ベートーヴェンの生涯 12/10)
白山展示 (良寛没後150年 11/10~11/29, 日本祭・年中行事 12/1~1/10)

～その他～

父兄会神奈川支部来館 11/28, 千葉県支部来館 11/29

旅に出かけよう

タイムマシンに乗るときの緊張感と、羊水内の胎児の安堵感に浸りに……。

もしも、足が拒否反応を示したならば頁と戯れ、異次元の世界へまでも旅してみよう、キラキラした発見をするために。(H)

訂正 前号 (No. 51) p. 3 左側見出し、岩波書店→河出書房新社。 p. 3 右側 14行目 131.4 : A : 76
—6—→080 : S—3 : 1—2